

「再建」が貴重な心の支え

はじめてがんを告知されたときと、再発という形で再び宣告されたとき、どちらがよりショックだろうか……。たいがいの方は後者だというのが、私もしかり。仕事で日本橋にいた私は、受話器を通じて耳に響く主治医の声にさすがに動揺を隠せなかった（のちに、一緒にいた仕事仲間はずっと気づかなかったと言っていたが）。

心臓の鼓動が速くなるのを感じながら、それでも「再建したい」という思いだけは伝えた記憶がある。

「再建」とは、摘出によって無くなった乳房を新しく作る。私は再建についての知識はほとんどなかったが、全摘後に膨らみが失われたとしても、再建という最後に残された道があるとの認識は持っていた。再建術の普及は、日本では遅れていること。保険の効く方法と効かない方法があること。摘出手術と同時に再建する方法と摘出後しばらく経ってから再建する方法の種類あること。……等々のほんやりとした知識をもとに、どこか他人事のような気持ちで、でも、すぐるような思いで話を続けていた。

私の主治医は優秀な外科医との評判であったが、再建となるとそれは「美容」や「形成」の世界。まったく分野が異なってしまうのだ。私の願いを聞いて、再建は摘出後になると思うがそのときはちゃんと紹介しましょう、と答えてくださった。思えばあのとき、がんの再発、全摘出手術、抗がん剤というこれから待ち受けているであろう過酷な現実のなかで、唯一明るい話題が再建だったように思う。辛い体験をしたあとの救いのようなもの。実はそのときはそれほど再建への思いが強烈にあったわけ

はないが、貴重な心の支えになっていたことは確かだった。

この連載の最初に、がんの体験と同時に長く一緒にいた恋人を喪った、と書いた。まさにそのとき、彼は強い背部痛でほとんど動けない状態に陥り、緊急入院をしたばかりであった。

二〇〇九年七月七日は、私の再発がわかった日であり、彼に「がんの骨転移」という診断がついた日でもあった。メールのやり取りで互いの病名がわかったとき、これは大変なことになりそうだなという嫌な予感が全身を巡り、そのまま地の底まで転がり落ちていくようだった。

再発がわかってから手術の日まで、ひと月近く時間があつた。その時間をフルに活用して、今度は手術後の生活について思いを馳せ、少しでも日常生活に支障がないようにしようと思き始めていた。まずは、抗がん剤治療の副作用である「脱毛」対策。それから再建に向けての情報収集である。

抗がん剤治療は、術後の補助療法として行われる。最初の手術後も念のためにと勧められ断っていたが、今度は受けざるを得ない。がんの骨転移に苦しむ彼の助言もあり、また乳がんは骨に転移しやすい性質があることから、すでに覚悟はできていた。

脱毛が具体的にどう進んでいくかわからなかったが、ほぼ確実に髪は抜けるだろう。ならば、仕事上ウィッグは欠かせない。手術後は何があるかわからないのだから、入院前にウィッグを選んでおこう。そう決めた私は、早速病院にあるパンフやネットの情報をもとに、自分に合うウィッグ探しに着手した。

本をつなぐ 8

28タイトルの全部をここで紹介できたらいいのに！

アリスの会 平田美津子

どんなにいいと勧められる本でも、その人の「その時」を得ないと心に届かない。その時々心のコンディションにぴったりのページが見つかるこの本が、私の本棚に仲間入りしたのは十四年前。同じ著者の画文集『野菜畑で』（架空社 一九九〇）に続く一冊で、ふと手にとって画をながめると、いつも新しい私に出会える。その時々で、違うページに心が留まるのだ。

表紙は庭のハーブたちのズーム、目を凝らすと幸せそうな二組の母子が緑の中に見えてくる。しつかり見ないと見えて



◆ハーブと野菜に日は暮れる
◆作画 川上綾子
◆定価：2625円
◆発行：架空社
◆ISBN4-87752-109-7

こないものがあるよ、とでもいいだろう。28タイトルの全部をここで紹介できたらいいのに！ 見開きごとに右側に画、左に一文。描かれたハーブ、野菜を愛でるもよし、「なごりのレンゲ」というタイトルに魅かれてことばに出会うもよし。幼い日、白詰草原で昼寝をした私には、とりわけ懐かしい。赤かぶもいいな。「丸顔組合・女の友情」、そうよそうよ、あなたは正しいと、仲間のなかでの信頼と励まし。「捨ててみる！」の迫力、パブリカととうがらしの赤がドーンとあるから、心にこぼれが届く。スペインのハーブの青は遠い地を想わせ、繊細でやさしく、ゴルゴダの丘、カステリヤ地方と、他の歴史にも誘ってくれる。美術館でハーブティーをかたわらに、ゆったりおしゃべりしているよう。

▲「本をつなぐ」原稿募集中！

その本を知ったきっかけを入れて、おすすめコメントを600字程度でまとめ、有限会社ゆいばと（表面参照）までお送りください（メール、ファクシミリ、郵便で受け付けます）。採用の方には記念品も準備しています。

編集後記

昨年は、本づくりをご一緒させていただいた二名の方が彼岸に旅立たれました。初めての経験であり、戸惑いと寂しさがまじりあった時間を長く過ごしました。そして、お元気だった最後のお姿が繰り返し心に浮かびました。年があらたまると、お二人とも、たくさん作品を残されたことに思いが至りました。お二人には、本を残していくことの意味を再認識させていただきました。ありがとうございます。

今、五百日を幸せに生きた男の子のお母さんが、そのいのちの時間をいねいに刻んだお原稿を本にしています。春には新刊としてお目にかけることができますはず。

年三回発行で始めた小紙ですが、しばらくは不定期発行とさせていただきます。(山)

お知らせ

ゆいばとでは、みなさまの作品や経験を本にするお手伝いもしています。随筆集、紀行文、自伝、歌集、句集、写真集、絵本などを作ってみたいとお考えの方は、お気軽にお問い合わせください。

編集・出版 ゆいばと

TEL 052-955-8046

Eメール yuiyama107@wine.ocn.ne.jp

「ゆいばと」バックナンバー *ご希望の方には送ります。無料です。

- 創刊号インタビュー/横幕真紀さん（『ずっとそばにいるよ』著者）
「ありがとう」を伝えたい！
- 2号 インタビュー/斉藤とも子さん（『きのこ雲の下から、明日へ』著者）
「きのこ会」を次世代につなぐ
- 3号 インタビュー/堂本暁子さん（『生物多様性』著者）
「COP10」の成果を未来につなぐ
- 4号 インタビュー/茶畑和也さん（イラストレーター）
そろそろ進むことにブレーキをかけないといけない
- 5号 インタビュー/にわせんきゆうさん&久子さん（『しあわせしあわせ』著者）
二十年という年月でものごとをみれば、物語がある
- 6号 インタビュー/神山里美さん（『こころのせめぐり』著者）
やっぱり私はお寺が好き。好きっていう以外何もないの。
- 7号 インタビュー/オカダミノルさん（『東海の日職一芸』『長良川鉄道ゆるり旅』著者）
しあわせって普通に生きることなのだと、あらためて感じた。